

国境を超える海ゴミ ～日本の防波堤、対馬～

中島 孝平

1. はじめに

2019年度の対馬アクションリサーチ合宿の3日目、対馬市しまの力創生課の前田剛氏と一緒に私たちは大量の海ゴミが漂着する海岸（上県町志多留海岸）を見学した。毎年、国からの補助金も含めて三億円かけて処理しているが、回収しきれっていない現状がある。今回のレポートでは現状、課題、私たちにできることの順番で記していく。

2. 対馬の海ゴミの現状

対馬は地理的な条件から、海ゴミが多く漂着する島で、潮の流れや季節風によって対馬の海岸に多くのゴミが漂着している。これらのゴミの種類は、漁網などの漁具、発泡スチロール、使用済み注射針、中身のわからないビン、流木などがある。ハングル文字や中国語のラベルの付いたゴミも多く見られる。このことから、漂着ゴミに国境はなく、せき止める術もない。また、対馬に漂着するゴミの多くがリアス式海岸に留まるため、発見・回収が困難なケースもあり、統計よりも多くのゴミが存在すると考えられる。発泡スチロールは油化してから処分することもできるが、海外から流れてきた発泡スチロールは不純物が多いため質が悪く、油化粉碎する際に機械を壊してしまうことから、回収したすべてを処理することはできない。太陽光等によって劣化した発泡スチロールは、1mm～5mmほどの微小なプラスチック（マイクロプラスチック）となり、食物連鎖を通して、生物の体に蓄積されていく。これは生物濃縮の問題の原因にもなりうる。また、現地で、前田氏の話聞くまで、流木はゴミに含まれないと思っていたが、海水を漂い、塩分を多く含んでいるため材木として使用することは不可能で、流木もゴミに含まれることがわかった。

データ上のゴミの内訳は、発泡スチロール 35%、プラスチック類 20%、木材 30%弱、漁網・ロープ 10%弱である。また、16年度の環境省のモニタリング調査によると、対馬に漂着したペットボトルのうち中国製が 17%、韓国製が 25%、日本製も 23%に上った（三宅玲子, 2019）。

また、三億円かけて処理していると述べたが、当初は国が全額補助していたものを、現在は処理費用の一割を対馬市が捻出している。一割といっても、毎年三千万円という金額は対馬市の財政に重くのしかかる。さらに、国の担当者は対馬市に対し、現状が何も変わっていないとして、補助金の減額予定を通告した。島の外から流れつくものを減らすためには、どうしたらよいのだろうか。

3. 課題

対馬の海ゴミ問題解決に向けて課題として以下の二つが考えられる。一つ目は、島民自身その海ゴミを目にする機会が少ないということ。二つ目は、目につきにくい海岸にゴミがたまること。対馬の海ゴミは深刻な問題であることをもっと市内で広めていき、関心を持ってもらう必要がある。

4. 私たちにできること

実際に対馬を訪問し現状をみた私たちにできることはないのだろうか。対馬に何度も行くことは難しいが、東京でもなにかできることはあるはずだと感じた。まずはプラスチックの消費を最小限に抑えること。日本から東南アジアに輸出されたゴミが海洋に放出され、対馬に漂着しているのなら、私たちにも大きな責任がある。もちろん他国から流れてくるものもあり、私たちは被害者ではあるが、同時に加害者でもあることに自覚を持たねばならない。海洋プラスチックの問題を自分たちの将来の世代に残さないためにも、今から行動し、プラスチックを消費し続けるこの生活を変える意識を持たねばならない。砂浜にゴミが漂着し、散乱していると、砂浜という貴重な観光資源を失う恐れがある。観光資源がなくなるということは、対馬市の財政が苦しくなり、島の経済が活性化しない。

つぎに、対馬の悲惨な状況を発信すること。島民でさえ関心のない人がいるのなら、対馬から離れた東京にはもっと知らない人が多いはずだ。対馬の美しい海を守るためにも、この問題を広めていき、活動呼びかける必要がある。すでに、対馬海ごみ情報センターのウェブサイトや様々な記事で情報は発信されているが、そのような団体と協力し、何か活動を試みるのも良いと思う。

また、今回のアクションリサーチで、ESD の取り組みも見学させてもらった。一部の学年学級で海ゴミに関する ESD が行われていたという。現地へのアクセスや予算確保の問題もあるとのことであるが、島内でさらに関心を持ってもらうきっかけづくりとして、この海ゴミ問題を、ESD の題材として普及できないだろうか。ふるさと学習の一環として取り扱うテーマとして、とても適していると思う。環境教育を通じて、子供たちや若い世代の間で、ゴミがあることが当たり前になってしまうことを防がなければならない。

5. まとめ

今回のアクションリサーチで、私たちにも環境保全や生き物のためにできることはあって、行動を起こすことが本当に大切なのだということ強く感じた。今までは海ゴミの問題や、ツシマヤマネコやツシマウラボシジミ等の絶滅危惧種の存在を聞いても、遠い土地の話だと思っていたが、いまではとても身近な話題に感じ、危機感を抱いている。この危機感と、現状を変えて、よりよい将来を作っていくことへの希望をモチベーションに、

行動をとりたいと考えている。また、問題意識やこれまでの活動を引き継ぐためにも、環境教育やESDは本当に有効であると感じた。持続的な開発を続けるためには、持続的な教育も必要だということがよく理解できた。ふるさと学習をし、まちを好きになり、大切にしようという気持ちが、美しい海や生き物を大切にしようという気持ちになり、社会をよりよくしていく行動が増えていくといった、環境教育やESDの自分なりの理想像を抱けた。

最後に、今回のアクションリサーチにおいて、多くの方々と関わりを持ち、多くの現場を見て抱いた想いを、今後無駄にしてはいけないと思うし、今回お世話になった方々への恩返しは、行動で示していかなければならないと強く感じた。

【参考文献】

- Chika Murat, 2018, 「『国境の島』対馬にたどり着く国境なき海ごみ前編」,
<https://jn.lush.com/article/tsushima-ocean-plastics-without-borders-1>
(2019年10月13日アクセス)
- 三宅玲子, 2019, 『海洋ごみの防波堤、対馬：プラスチック消費とどう向き合うか』,
<https://www.nippon.com/ja/japan-topics/c06301/> (2019年10月13日アクセス)
- ハフポスト日本版編集部, 2019, 「『日本はプラスチック廃棄物の処理を海外に押し付けている』専門家が指摘⇒今できることについて聞いてみた。」,
https://www.huffingtonpost.jp/entry/plastictrash_jp_5cedf983e4b0ae671058d843 (2019年10月13日アクセス)

(なかじま・こうへい 立教大学社会学部現代文化学科 3年 阿部治ゼミ)